

ペトロの手紙 I 3章 3~4節

「あなた方の装いは、編んだ髪や金の飾り、あるいは派手な衣服といった外面的なものであってはなりません。むしろそれは、柔和でしとやかな気立てという朽ちないもので飾られた、内面的な人柄であるべきです。このような装いこそ、神の御前で誠に価値があるのです。」

「神の御前で誠に価値があるもの」、それは、内面的な人柄。飾り立てた外面的なものではない。「外面的な装いだけを気にして失敗してしまう」という内容について考えていて、私はイソップ童話の「王様になりたかったカラス」を思い出した。鳥の王様を決めるコンテストにどうしても選ばれたかったカラスは、自分の黒い羽根では負けてしまうと思い込んでいた。そこで、落ちていたほかの鳥の羽根で自分を飾り付けて出場したところ、鳥の王様に選ばれた。しかし、その時王様に選ばれなかったほかの鳥たちが、口々に「それは自分の羽根だ!」とやってカラスがつけていた羽根をむしっていき、正体がバレしまう、といった話だ。小学生の頃は、「カラスは馬鹿だなあ」とか「ほかの鳥たちが意地悪だなあ」くらいの感想しかもっていなかった。しかし、仮にキリスト教の教えの例え話として捉えるなら、誰かの真似をするのではなく、自分が持っているものを生かし、自分らしい生き方をすることが大切だというメッセージが込められているのだらうと、今では思う。他者の美しさを妬んだり、羨んだり、余分に飾り立てたりしなくても良いのだ。自分に元から備わっているもので、良い所を自分で認める目を持つことが大切なのだ。言葉では理解できるような気がしても、実際には自分に自信が持てずに、「ああだったら、こうだったら」と、ないものねだり的な思いで気持ちがいっぱいになってしまったり、あせったり、落ち込んだりする人も多いと思う。私も少なからずその中の一人だとも思う。では、どのようにしたら良いだらうか。やはり、各々の内側に向かって問いかけてみる必要があると思う。例えば私なら、今はまだ目を出していない可能性や、自分のこれからの伸びしろがたくさんあると信じてみたい。そして、自分の中の未熟な部分を発見しても、それならそれでどのように成長させていきたいか、そのためには何をすればいいのかを自分に問いかけ続けることが大切なのだらう。これからは私は、自分の内面を素直に見つめ、神の御前で誠に価値があるものを大切にして生きていきたいと思う。